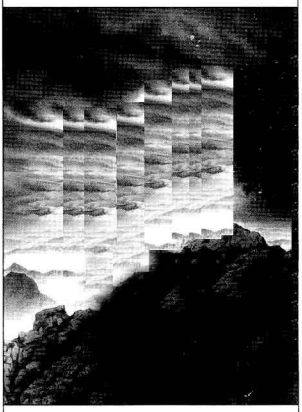
運命の塔

深谷忠記

運命の塔



深谷忠記

講談社

深谷忠記（ふかやただき）
1943年東京生まれ。東京大学理学部卒業。82年『ハーメルンの笛を聴け』が第28回江戸川乱歩賞最終候補に、85年『殺人ウィルスを追え』（『一万分の一ミリの殺人』と改題）がサントリーミステリー大賞佳作になる。以後、緻密な構成と論理に支えられた秀逸な謎解きを一作ごとに展開し、本格推理作家の地位を確立する。主な作品に、『0.096逆転の殺人』『アリバイ特急＋－の交叉』『札幌・鈴蘭伝説の殺人』『人麻呂の悲劇』など。

運命の塔
一九九四年五月二十七日　第一刷発行

著　者――深谷忠記
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号――一一二―〇一
電　話――編集部　〇三―五三九五―三五〇六
販売部　〇三―五三九五―三六二二
製作部　〇三―五三九五―三六一五
印刷所――豊国印刷株式会社
製本所――黒柳製本株式会社
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第三出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
©Tadaki Fukaya 1994 Printed in Japan

¥1900-

ISBN4-06-206958-X（文三）

運命の塔

装画·装幀／上原徹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

プロローグ……5
白の序章……7
空の誘拐……28
死の赫炎……96
虚の遡行……168
零の対決……241
無の迷宮……374
エピローグ……518
あとがき……524

【塔】　供養・報恩のため、または霊地を表わすために設けられる高層建築物。高くそびえ立つ建築物。元は仏骨を収めた建造物をいう。

プロローグ

母が呼んでいる。父が呼んでいる。二人とも、まるでどこかに消えてしまった道義を捜し求め、絶叫しているかのような声だ。彼はずっとここにいるというのに。

〈なーに？〉

道義は、夢うつつの中で返事をする。

ここだよ。ぼくは、ここにいるよ。でも、眠いんだ。眠いから、大きな声が出ないんだよ。

それにしても、暑い。なんて暑いんだろう。暑いだけじゃない。目を閉じているというのに、瞼の裏がどうしてオレンジ色なんだろう。どうしてこんなに明るいんだろう。もう朝なのだろうか。

いやだな。まだ眠いのに、ぼく、起きるなんて、いやだな。

「道っちゃん！」

「道義ィー！」

二人の声が迫ってくる。

道義は、そろそろと薄目を開けかけ、慌てて閉じた。

真っ赤だったのだ。目の前の空気が、山の向こうに沈む夕陽のように、真っ赤に染まっていたのだ。

胸の鼓動が全身に響き出す。

熱い。ああ、熱い。

何だろう。どうしたのだろう。
恐るおそる再び目を開けた。
燃えていた。襖が、天井が、柱が火を吹いていた。絵本で見た竜のように、真っ赤な炎を吐き出していた。シューシュー、バチバチと音をたてて。
道義の心臓は縮みあがった。胸のあたりをライオンの爪で押さえ込まれたようだ。動こうとしても動けない。泣き出した。母の名を呼びながら。
いや、自分ではそのつもりだったのに、声が出ない。風邪をひいたときのように、木枯しのような音が喉から漏れるだけ。
天井から、ばらばらっと火の粉が降ってきた。
死――。死という認識があったかどうかはともかく、彼は死を感じた。この世に生まれ出てわずか三年と四ヵ月にすぎない生命体が、本能的に死の恐怖を覚えた。
次の瞬間、燃えている襖の向こうに母の姿が見えた。母は襖を蹴破り、部屋の中へ飛び込んできた。
道義は布団を撥ねのけた。喉を通過する空気がやっと声になった。
「母ちゃん、母ちゃん、母ちゃん……！」
彼は声をかぎりに呼んだ。叫んだ。叫びながら母に抱きついていった。
つづいて、父が……。いや、父が部屋へ駆け込んできたような気もするが、定かではない。その後、自分がどうなったのか、父と母がどうしたのか、道義の記憶にはない。彼が母にむしゃぶりつくのとほとんど同時に、頭の上で大きな音がしたかと思うと、火の塊りが崩れ落ちてきた。
激しい熱さとも痛みともつかない感覚に全身を襲われた。
気を失う前に、一瞬、肉の焼け焦げるような臭いが鼻先に漂った。

白の序章

1

一九七二年（昭和四十七年）春

四月半ばを過ぎた午後だった。松本北警察署捜査係長の田村謙作が、暖かな陽気と満腹感から、作成中の書類の上でつい船を漕いでいたとき、前の電話が鳴った。

田村はびくっとして顔を起こし、部屋に誰もいないのを目で素早く確認してから、口元の涎を手の甲で拭った。受話器を取り、応答した。

警視庁の平岡道義という警官が尋ねてきている、という受付からの内線連絡だった。

田村は、警視庁の刑事が尋ねてくるといった話は聞いていなかったし、平岡道義という名にも聞き覚えがない。何だろうと怪訝に思いながら、用件を質そうとすると、彼が口を開くより先に、「個人的な話があるそうなんです」と受付の警官が付け加えた。

個人的な話と聞いても、田村の疑問は消えない。警視庁の人間がどうして自分に……と、むしろそれは大きくなった。が、考えているより会ったほうが早い。彼は、刑事課の部屋まで上がってきてくれ、と訪問者に伝えさせた。

足音がすぐに三階まで上がってきた。ノックの音に、田村は「どうぞ」と返事をして、腰を上げた。なぜともなく彼は中年男を想像していたのだが、ドアを開けて入ってきたのは、髪を短く刈った二十歳になったかどうかといった青年だった。

田村は歩み寄って迎えた。

青年は、心持ち釣り上がった切れ長の目をしていた。右耳の下に薄い茶褐色をした、長さ五、六センチの三日月形をした引き攣れがあった。身長は百七十五、六センチ。すらりとした均整のとれた身体を、紺のスーツにぴっちりと包んでいた。

青年は田村に名刺を差し出し、警視庁杉並東署に勤務している巡査・平岡道義ですと名乗ったあとで、豊科中央署を訪ねて田村の名を聞いてきたと言った。

田村は、名刺の「平岡」の文字と火傷の痕と思われる男の顔の痣、それに豊科中央署という言葉から、〈もしかしたら……〉と思った。

と、彼の想像どおり、青年がつづけた。

「私は、今から十七年前……昭和三十年に三郷村で起きた放火殺人事件の被害者、平岡幸治と珠代の長男です」

「ええ、分かりました」

田村はつい懐しそうな口ぶりになり、慌てて表情を引き締めた。

そんな田村を見ても、平岡道義は心を動かした様子がない。田村に会えた喜びを示すわけでもなく、かといって、彼の反応を咎めるでもなかった。無感動な視線をじっと彼に注いだまま訊いた。

「そのとき、中心になって事件の捜査に当たられたのが田村さんだったとか？」

「そうです」

と、田村は答えた。あらためて相手の顔を観察する。この精悍な顔立ちをした青年があのとき九死に一生を得た幼児か、と複雑な感慨を覚える。こんなに大きくなり、しかも自分と同業の警察官になっていたのか……。

「ついては、田村さんに事件についてのお話を伺いたいのですが」

平岡道義が言葉を継いだ。

「話すのは構いませんが、聞いてどうするつもりですか？」

「別にどうこうするつもりはありません。父と母が殺された事件の詳しい事情を知っておきたいだけです」

平岡道義の目が、何かの意思を示すように一瞬強い光を帯びた。それを見て、田村は、もしかしたら道義は事件の真相を追及するつもりでいるのではないか、と思った。

が、彼はその点には触れず、別の質問をした。

「あなたには、ご両親は事故で亡くなったということにしておこうという話だったんですが、いつ、殺人だと……？」

「中学三年のときです。昭和三十年ごろ毎朝新聞の長野支局に父親が勤めていたという友達に聞きました」

道義が答えた。「友達が家で、私の顔の痣や両親が焼け死んだ火事の話をすると、父親が、それなら事故ではなく放火殺人ではないかと言ったんだそうです」

「なるほど」

「ただ、それでは詳しい話を訊いてくれと私が友達に頼んだところ、父親は、自分の思い違いだった、別の事件と混同していたと前言をひるがえし、何も教えてくれな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かったんですが」
「では……？」
「そのときは、結局はっきりしたことは分かりませんでした。当時、私は世田谷区内の養護施設にいたので、施設の職員や親代わりになってくれていた人に尋ねたんですが、いま田村さんが言われたように、事故ということで口裏を合わせていたらしく、みな、殺人なんてとんでもない、と否定したからです。ですが、私はずっと気になっていて、高校二年のとき、長野市の信州日報本社を訪ね、昭和三十年の新聞を見せてもらいました。それによって、友達の父親の言ったとおりだった、と知ったんです」
そのときのことを思い出したのか、道義の目の中を固い翳がよぎった。
「それで、あなたは警察官になろうと思ったんじゃありませんか？」
田村は自分の想像をぶつけた。
道義は田村の質問の真意が分からないからか、黙って彼を見つめていた。
「ご両親を殺害した犯人、杉井源一郎をご自分の手で捕え、事件の真相を明らかにしてやろう――そんなふうに考えられたんじゃないんですか」
田村は言い換えた。
「警察官になれば、いつか事件の真相が突き止められるかもしれない、と考えたのは事実です」
道義が、田村の想像を半ば肯定した。
「警視庁に入られたのはいつ……？」
「高校を卒業した一年前の春です」
田村は、自分の想像が当たっていたのを確信した。一年前の採用なら、道義は今、警察学校を出て、現場における新任教養が始まったばかりにちがいない。つまり、彼は、全寮制の学校教育を修了して杉並東署に配属されるや、すぐに、両親の殺された事件を捜査した豊科中央署を訪ねたのであろう。
田村の脳裏に、十六年前の事件の夜の光景がよみがえった。真っ黒い巨大なアルプスの山並をバックに、燃え盛る紅蓮の炎。花火のように高く舞い上がる火の粉。藁葺き屋根のばちばちと弾ける音。田村たちがジープで駆けつけたとき、幼児は近所の人の腕の中で文字どおり火が点いたように泣いていた。その声が、まだ田村の耳の奥に残っている。
その幼児が中学生、高校生になり、事故で死んだと思っていた両親が実は殺されたのだ、と知った。両親を殺し、自分に瀕死の重傷を負わせた犯人がまだ捕まらずに

逃げている、と知った。とすれば、自分の手で犯人を捕まえ（すでに殺人罪の時効が成立する十五年は過ぎていたが）、事件の真相を明らかにしたいと考えても不思議はない。

田村はそう思い、道義に不快感を覚えなかった。自分の知っているかぎりの事情を話してやるつもりになっていた。もし、警視庁の刑事が田村たちの担当した事件を掘り返そうとして事情を訊きに来たのなら、勝手にしろと言うところである。が、道義はたまたま職業が警察官というだけで、彼が知りたがっている事情は警視庁とは関係ない。

それに、道義の意図がどうであれ、彼個人の力で杉井源一郎を捕まえられる可能性はほとんどゼロに近かった。この判断も――田村は認めたくなかったが――彼の気持ちを軽くしていた。田村とて、できることなら、杉井源一郎の口から犯行の動機や犯行の詳しい方法を聞いてみたい。しかし、事件の直後、田村たちが懸命に追ったにもかかわらず、杉井源一郎の行方は杳として摑めなかったのである。十六年半も経った今、それが分かるとは思えなかった。

田村謙作は、窓を背にした課長の大机の手前にある自分の席に道義を導いた。隣の椅子を引いてやって掛けるように促し、茶を二人分淹れてきて、自分も腰を下ろした。

茶を勧め、道義の当たった信州日報は続報、続々報とかなり詳しく事件を報じたので自分の話はそれほど新しい事実を付け加えられないかもしれないと言うと、道義はそれでも結構です、と応えた。

田村は温い茶を一口啜ってから、火事の現場へ駆けつけたときのことを思い起こしながら話し出した。

それは、一九五五年（昭和三十年）の十一月五日の出来事だった。その十日後の十五日に二大保守政党である民友党と憲政党が合同して民政党となり、いわゆる「五五年体制」が始まったので、よく覚えている。

時刻は午後十一時二十分ごろ。まだテレビのない時代だったし、田舎は夜が早いので深夜だった。田村の自宅は豊科中央署から歩いて十五分とかからないところにあったが、彼はその晩宿直だったので、署の仮眠室で横になっていた。そこに、豊科町に隣接した三郷村で火事が発生し、燃えている家の中に人がいるらしいとの報が入り、田村たちは署の中古のジープで現場へ向かったのである。

村の消防団は、田村たちより三、四分遅れて現場に到

着した。消防車といっても自動車ではなく、ポンプを乗せた手押し車である。消防団員たちは用水脇にポンプを据えてすぐに消火活動を開始したものの、最早、藁葺き屋根の母屋は手のほどこしようがなく、庭の反対側にある納屋に飛び火するのを防ぐので精一杯のようだった。周りは、桃畑がわずかにある以外は、取り入れの済んだ水田と桑畑。隣家は三百メートル以上離れていたので、延焼のおそれはなかったが、母屋に寝ていたはずの平岡幸治・珠代夫妻は絶望と見られた。ただ、夫婦のどちらかが咄嗟に窓から外へ投げ出したらしく、長男の道義だけは助かったようだ。田村たちのジープが庭に着いたとき、近所の主婦の腕の中で激しく泣きながら、彼女と一緒にオート三輪車に乗せられ、診療所へ運ばれて行くところであった。

火事は母屋を全焼して鎮火し、焼け跡から男女二人の黒焦げの死体が折り重なるようにして見つかった。奥の部屋ではなく、道義が寝ていたらしい、窓のある南西の部屋のあたりである。顔の判別は不可能だったが、平岡夫妻——幸治（二十七歳）と珠代（二十五歳）——であるのは間違いなく、息子の道義だけは外へ投げ出して助けたものの、自分たちは逃げるひまがなかったもの、と想像された。

翌日、警察と消防による合同の現場検証が行なわれた。その結果、母屋の周りに灯油が撒かれていた跡が見つかり、更に、火元が火の気のないはずの戸袋付近と推定された。田村たちは俄然緊張した。放火の疑いが濃厚になったからだ。

それに前後し、納屋の六畳に寝泊まりしていたゲンさんこと杉井源一郎という若い男がいなくなったことも、ほぼ確実になった。前夜、男の姿が見えず、田村たちは多少不審を覚えてはいたのだが、男はよく松本まで夜遊びに出かけていたと聞き、朝には帰るかもしれないと思っていた。ところが、昼過ぎになっても姿を現わさなかったのである。

杉井は、二十五、六歳の中肉中背の男だという。だが、近所の人たちは、彼の出身地や正確な年齢を知らなかった。杉井源一郎というのも、本人がそう言っていただけで、本名かどうか定かではない。前年の夏ごろ、ふらりと村に現われ、その後、農作業の忙しいときに平岡家の納屋に泊まって働き、どこかへ消えては、またふらりと姿を見せていたらしい。酒好き、遊び好きで、雨の日など村の若者たちを集めて花札賭博をしていたようだが、人は悪くなく、道義を可愛がってよく一緒に遊んでいたという。平岡幸治・珠代夫妻ともうまくいっていた

ように見えたし、人殺しをするような人間にはとても見えなかった、というのが彼を知る者たちの言葉だった。

しかし、田村たちがもう一晩待っても、杉井源一郎は姿を見せなかった。そこで、田村たちが彼の使っていた納屋の六畳間を捜索したところ、残されていたのは、着古した衣類、タオル、歯ブラシなどの日用品だけ。金目のもの、身元を突き止める手掛かりになりそうなものは何一つなく、計画的に姿をくらました疑いが濃くなった。

田村たちは、杉井は平岡幸治か珠代と何らかの関係があったのではないかと考え、平岡夫妻の過去も調べた。その結果、平岡夫妻は昭和二十七年に結婚し、結婚と同時に古い農家と土地を買って（未登記だったが）東京から信州へ移り住み、農業を始めた、という事実が分かった。信州へ来るまでは、平岡は民友党代議士・大河原善造の運転手をしており、珠代もその二年前まで大河原家の下働きをしていた。大河原善造といえば、火事のあった前年（昭和二十九年）に起きた海運疑獄事件で逮捕寸前までいった民友党副政調会長であり、保守合同が成ってしばらくした昭和三十年代後半から現在まで、ずっと民政党の中枢にいる人物である。平岡幸治がなぜそうした政治家の運転手を辞めて田舎へ引っ込み、農業を始めたのか、家や土地を買う金をどうして手当てしたのか、は分からない。昭和二十五年に大河原家の下働きを辞めてからの珠代が、平岡幸治と結婚するまでの二年間どこで何をしていたのか、もはっきりしない。分かったのは、珠代が大河原邸にいたころから平岡が彼女に思いを寄せていたらしいことと、満州で死んだ平岡の父親が三郷村の隣村の出身で、平岡も子供のころ四、五年そこに住んでいたという事実ぐらいである。そうした縁から、いつか家庭を持ったら信州に帰って暮らしたいと考えていた――と、平岡は近所の人たちに話していたらしい。

それはともかく、問題は、平岡幸治か珠代が信州へ来る前に杉井源一郎と何らかの関わりがあったのかどうか、という点である。

しかし、大河原家の関係者に訊いても、それは摑めなかった。二十五、六年ごろ、屋敷の近くをうろついていた杉井源一郎に似た男を見かけたことがある、と善造の秘書の一人が言ったが、写真がないため、杉井だったかどうかの確認はできなかった。

ただ、杉井が松本市の飲み屋で〝生まれ育ったのは大阪だが母親が山口県の萩市出身だ〟と話していたことから、彼が杉井源一郎（二十五歳）である事実だけは判明した。母親は大阪の空襲で死亡した杉井絹子。私生児の

ため、父親は不明。萩市の絹子の実家には彼女の弟一家が住んでおり、源一郎も子供のころには何度か訪れていたらしい。が、戦後は音信不通で、絹子の弟は、源一郎が生きているかどうかも知らなかった。因みに、大河原善造の祖父は長州出身で、萩市は善造の選挙区だった。また、善造は戦前、大阪で貿易会社を営んでいた。そこで、田村たちは、もしかしたら善造と杉井絹子あるいは源一郎との間に何らかの関わりがなかったかと思って調べたが、両者に接点らしきものが存在した形跡は窺われなかった。

田村たちは、平岡夫妻と付き合いのあった村人たちについても、動機の有無やアリバイ等について調べた。だが、杉井以上に怪しい人物はどこからも浮かんでこなかった。そのため、火事が放火によるものと確定した段階で、田村たちは杉井源一郎を犯人と断定し、放火・殺人の容疑者として全国に指名手配した。

それから一週間ほどして、田村たちは、〝事件のあった夜十一時半ごろ、火事の現場から四、五キロ松本市のほうへ行った隣村で、東京ナンバーの乗用車が道路脇の溝に後輪を落とし、近くの住民の助けを借りて引き揚げた〟という話を聞き込んだ。捜査が行き詰まりを見せていたときだったので、事件に関係あるのでは……と、田村たちはすぐに車の引き揚げを手伝った人たちを訪ね、詳しい話を聞いた。しかし、運転していたのは杉井とは全然似ていない二十八、九の男と分かり、誰かが隠れて車に乗っていた様子もなかったため、事件とは無関係な車だったと判断した。

その後も、事件の翌早朝、杉井源一郎に似た男が三郷村の方角から歩いてきて、一キロほど先の松本駅のほうへ向かって急ぎ足で去るのを見た、事件の二、三日後、松本の飲み屋街で彼を見かけた、新宿駅で彼によく似た男が電車に乗るのを見た、といった情報が何件か寄せられた。だが、いずれも追跡不可能な情報ばかりであり、結局、杉井源一郎の所在を突き止められないまま、捜査の幕を下ろさざるをえなかったのだった。

「そして、十七年後の今日まで、杉井の行方は杳として分からないのです」

田村謙作は説明を終え、茶碗の底に残っていた滓のまじった茶を飲み干した。机の端からハイライトの箱を取り、一本抜き取って口にくわえた。

道義は何も言わない。いま聞いた話を頭の中で反芻しているようだ。

彼は、田村が話している間も一度も言葉を挟まなかっ

た。背筋を伸ばし、じっと田村の顔を見つめていた。田村が燃え盛る炎について、平岡夫妻の死と泣き叫ぶ道義自身について語ったときだけ、腿の上に置いた両拳を握りしめ、かすかに顔を歪めたが、あとはほとんど表情を変えることもなかった。

田村は、近くの蕎麦屋のマッチで煙草の火を点けた。一度大きく吸って、煙を吐き出し、説明が下手なので分かりづらかった点はないか、と訊いた。

「いいえ、よく分かりました」

と、道義が初めて口を開き、軽く頭を下げた。

「では、質問があったらしてください。知っていることは答えます」

「私たち家族が寝ていた母屋の周りに灯油を撒いて火を点けた犯人の動機は、結局、はっきりしなかったわけですね」

道義が確認した。

「しませんでした。金を盗んで、逃げるためだったのか、それとも父上か母上に対して何か恨みでもあったのか」

「金の盗まれた形跡は？」

「分かりません。なにしろ、ほぼ全焼でしたから」

「事件のあと、私はどれぐらいの間、病院に入っていたんでしょう？」

「豊科の診療所から松本の大学病院へ運ばれ、三ヵ月近く入院していたように記憶しています」

「それから静岡の伯母の家に？」

「そうです」

平岡幸治も珠代も、ともに身内に縁の薄い者たちだった。平岡の場合、両親は満蒙開拓団として渡った満州の地で病死し、二人の兄は戦死。珠代の場合は父親は戦死し、母親は東京大空襲で焼け死んだのだという。そのため、道義は火傷が癒えると、唯一の身内とも言うべき母方の伯母――珠代の姉――に引き取られたのだった。

ところが、その伯母も道義を引き取って二年もしないうちに船の事故で死亡した、と田村は風の便りに聞いた。が、その後、道義がどうなったか――は聞いていない。

田村は、煙草の煙を吐きながらさりげなく掛け時計に目をやった。

三時だった。

田村の視線に気づいたらしく、道義も自分の腕時計を見て、長い間お邪魔しました、と言った。

「いや」

道義が腰を上げたので、田村は煙草の火を灰皿に押し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.